

---

# 聖看護天使『患者にエイド』

雨月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖看護天使『患者にエイド』

### 【著者名】

Z7728E

### 【作者名】

雨月

### 【あらすじ】

事故を起こし、入院していた少年のもとへある看護師がやってくる！？その少年と看護師の邂逅の瞬間。

(前書き)

始まりが非常に痛いですね。いや、いきなり何を言つてているんだと思われるかも知れませんが、まあ、読んでみたらわかると思います。あまり連載とか考えていませんが……感想、評価なんかもらえると非常に嬉しいです。え? どのくらい嬉しいかって? そうですねえ、某太鼓のゲームを一曲フルコンボするくらい嬉しいです。それでは、評価感想、どちらかよろしくお願いしたいと思います!

## 看護聖天使“患者にエイド！”

### プロローグ：

先週、俺はバイクで事故つてしまい、右足を折るという人生初の骨折を経験した。骨が折れるとはよく言つたもので、なるほど、確かに折れてしまうと痛いものは痛かつた。何を馬鹿なことを……

そう言つている人がいるのなら一度、骨を折つてみるがいい。風邪になつて初めて健康が一番だと気がつくようなものだ。

両親が早くに金だけ残して事故つて死んで、ちょっとばかし事故には気をつけていたつもりだつたのだが相手のわき見+飲酒運転で俺は危うく死にそうになつたのだがそのときにあんまり見たことのない両親の姿を見た気がして気がついたら俺はこの相部屋にいたといつことに気がついたのである。

「あ～あ、早くよくなんねえかな～」

確かに昨日、俺はそんなことを言つた気がした。それが、間違いだつたことを知るのは次の日の朝だった。

### 第00話

「それは悪魔だつた

「ん……む」

日差しがあたつてきていると朝のようだ。清潔感と  
いうか、無機質な白色の部屋の天井が俺の視界に入つてくるのをら  
くらくと確認することができるのでが……まだ、俺は眠かつた。

「……ふう

再び俺は目を閉じてしまつたのだが……

「さあ、朝ですよ～蒼疾君、おきましょうね～」

やけに俺を子ども扱いしているような声が聞こえてくる。まあ、

それでも俺は無視して眠っていた。

「ほおら、早くう~

ゆすりてくるが、そんなんじや俺は起きない。

「ほらほら、早く起きないと~

その昔、俺は五個ほど目覚ましをつけてしまつとしていたのだからな……そんな甘いやり方じや……

こき~~~~ん

その瞬間、目の前が虹色にスパーク! お星様がぼくちんの目の前に光臨!

「つ~~~~~」

「あは 起きた起きた

股間を押さえて俺はベッドの上に起きた。だからは涙が流れている。

「おはよ~、蒼疾君

蒼疾の体内

A

「なんだ? まだ未使用の兵器、ジエノサイド・マグナムが起動しなくなつたぞ!~?」

B

「敵襲か!~? いつもこの時間だつたら勝手に起動するはずなのにな

」

A

「そのよつだな~~~~~」ひひむ、まさか、的確にこれを狙つてくる恐ろしい相手がいるとは……

「……

C 「痛み体感システム、レベル10! 危険です!~」

A

「何？ そのような威力だったのか…… 一体、敵は何が目的だ？」

俺が起き上がった先にいたのは見知らぬ看護師の服を来た女性だった。年齢は俺より上に違いないだろう。

「な、なにするんすか！ 危うく女になつちまつといひでしたよ！」  
「あら、大丈夫 私は手加減を知つてゐるから 手加減してなかつたら今頃君のそれ、いつてたよ」

まあ、朝つぱらからなんて危険な発言をましょ！？

「くあ、いてえ……」

俺がそういうと看護師はさすがにやりすぎたと思ったのか急に心配そうな顔になつて俺の押さえているところを覗き込むようにしてきた。

「大丈夫？ さすつてあげようか？」

「ひ、ひやあつ……い、いや、結構です」

「そんな遠慮しなくても……」

彼女が右手に何かを隠すのが見えたのだが、それが実は金槌だった。俺のジエノサイド・マグナムよ……よくぞ金槌の一撃を耐えたものだな…… その勇姿は賞賛に値するに違いない。

「も、もう大丈夫ですっ！」

「え？ 本当に？ 本当に大丈夫かどうかみてあげるわ」

そういうつてマジでパジャマをずりさげようとしてくる看護師に俺はマジであせつた。こ、これは確かに嬉しいんだが……いやいや、そんなことが出来るはずがない！

「や、やめてくれえ……」

「ほら、動かない！」

だが、いかんせん見た目はひ弱な女性なのに相手のほうが力があつた。瞬く間に俺は下半身がパンツだけとなつてしまい……

「ちょっと！ マジでやめて！ それ以上はやばいって！ モザイクかかる…モザはいってR指定必須になるつて…」

「ほらほら、暴れちゃ駄目だって！ ほら、もうちょっとで確かめて

あげられるからねえ」…………

ふざけてやつていいのかと思えば、その瞳はとても真剣だつたりする。お、恐ろしい人物だ。ここまで真剣にやつていいのなら抵抗するのやめちやおつかなあ」と思えてくる自分が悲しかつた。

だが、半ば沈没しかかつていた…………いや、既に氷山にぶつかつて船のさきつちよしか出でていない状態で近くを漁船が通りかかつてくれたようだ。

「おや、吉田君の健康報告が遅いと思つてたら君が来てましたか」長身に白衣で眼鏡をかけた冷静そうな人が入つてきた。

「せ、先生！助けてください！」

俺はその人に助けを求めた。

「ふむ、やはりこういつた状況に陥つていたか…………ルム・ハーベン、彼は大丈夫だからこつちに来てくれ」

「へ？ わ、わかりました」

そういうつて謎の看護師は僕から離れると先生の隣にたつた。

「い、一体全体その看護士さんは何ですか！？ 朝から金槌で叩かれわ、パンツを脱がされそうになるわ…………」

既にパジャマの下はどこかに飛んでいつてしまつていて、何故か上のほうもすべてボタンがはずされていたりする。

俺の言つたことを聞いて先生は『ああ、そういうえば紹介がまだだつたな』とか咳いて隣の看護師を前に出す。

「…………この子の名前はルム・ハーベン。今日から君に専属でついた看護師だ。以後、よろしくやつてくれたまえ」

「よろしくお願ひします」

「にや、にやに～！？」

俺はそんなんばなな…………いやいや、そんな馬鹿な！？と思ひながら呆然としているとさらに先生は続けた。無表情が逆に恐かつた。

「昨日、こここの廊下を通つていたらはやくよくなりたいな」と言つてゐる君の声が聞こえてきたからな…………実のところ深夜から君の部屋にはルム・ハーベンがずつといたのだよ。先ほどもいつたと

おり、君に一十四時間、ずっとついているから安心したまえ」  
なぜだらう？先生が何故か俺に死刑宣告をしているような気がする。

「…………」

言葉を失つてゐる俺にさらに先生は続ける。

「ああ、別に彼女を専属で着けたからと言つて入院料が上がるといふことはないから安心した前。どうせ、貧乏人、……げふんげふん君のような好青年は色々と大変だらうからな……それに、我々としても厄介払い……げふんげふん……ルム・ハーベンもやる気を見せてくれていてるし……邪魔者か……げふん……」

……こちらも仕事中に話しかけてくるよつた輩がいなくなつてせいせいしたよ」

「先生、最後のほうは本音がまる聞こえ声ですよ…………」

「ま、君のお世話は今日からこのルム・ハーベンが面倒を見てくれるつてことだから仲良くしてやつてくれたまえ」

今、心なしか暇つぶしの相手をしてやつてくれつて聞こえた気がした。ともかく、俺の股間をいじめる相手のほうに視線をやると彼女は俺の視線に気がついたのか、おもいつきり頭を下げて名乗つた。

「ルム・ハーベンです！これからよろしくお願ひしますね、蒼疾君！」

あつけにとられた俺だつたのだが、彼女の言つた言葉に對して慌てて返事をする。

「は、ま、まあ…………よろしくお願ひします」

それを見ていた先生が俺を見て『ふむ』と頷いたように見えた。

「…………では、朝食を運んできてくれたまえ、ルム・ハーベン。私はここで失礼させてもらおう」

「はいっ！任せください！」

ルムさんはそういうつて去つていつたのだが、失礼するとか言つていた医者である先生はここに残つたままだつた。そして、わざわざ廊下まで一度出て行き、もう一度はいつてくるというおかしな行動

をした後にこちらに近づいてきて、耳元でしゃべった。

「…………吉田君、今日から君は個室だよ」

「え？ 何でですか？」

「まあ、病院側の意見というか、そういうものがあるんだ。それと、

「今後、君が怪我などをした場合この病院に来れば無料で診察しよう」  
俺はそれを聞いて当然のよう驚いた。

「アーチー、何で机の上に？」

「ああ、それは……」

その先を言おうとするヒルムさんがおぼんを持って戻ってきたのだった。既におぼんにはおかゆのようないい飯と具の少ない味噌汁とかがこぼれていたりする。

「また今度、いの」とついて語をう

先生はモニヒと出て行った。  
「さあ、さあ、さあ」と、  
リムさんがあたまを下して、  
つた。

「さ、朝食の時間ですよ～お口をあ～ん！してくださいね～」  
そういうレンゲで俺の口におかゆのよつない飯を食べさせよう  
とするが……

「大丈夫ですって！自分で食べれます」

いいです！私が食へさせます！で、

「……………」、4階でしたよね？」

「…………ええ、まあ」

「そうですか……ご飯を食べてくれないのなら……」

めのう。

「ちよつとまつてくださいってー何で飛び降りよつとしてるんですかー！」

「大丈夫です！私には翼が生えてます！！」

確実におかしいことを言いながら飛び降りようとしているので俺

は彼女を止めようとしたが、彼女の力は強く、難なく俺を突き飛ば

した。

「がはつ！！」

背中が備え付けのテレビにあたり、テレビが何故かしりもちをついた俺の右腕をつぶした。

「ぐあああああああ！？」

叫んだ瞬間、飛び降りたはずの彼女が窓のふちに立っていた。

「だ、大丈夫ですか！？」

「！？」

彼女の背中には光り輝く何かがあつた。痛みも忘れてそれをみていると、彼女が病室の中に入つてくる。その瞬間、あの光は消えて慌てた顔のルムが顔を覗き込んでくる。

「す、すみませんっ！..」

「え？」

折れた俺の右腕を掴んで彼女は詫びた。

「私の我慢のせいで利き腕を折つてしまつて……何といつたらいいか……」

確かに折れた根本的な原因は彼女にあるのだが、彼女の飛び降りを阻止できただけでよかつたと考えたほうがいいかもしれない。

「気になくていいつて……ちょっと痛いが、まあ、先生がそういえば治療代はタダにしてやるつて言つてたし……」

そのことを言うと彼女は驚いたような表情をした。

「そ、そなんですか！？ですが……」

「ま、ルムさんがいるから支障はないだろうから世話のほうはよろしくお願いするつて！この通り、右腕折れちゃつてるからね。ああ、まだ朝食あるから食べさせて欲しい」

俺はそういうてナースコールを押した。ナースコールを押したのだが、先ほどの先生が姿を現した。

「ふむ、早速か……とりあえず、こちらに来たまえ。ああ、ルムはここで待機、わかつたかね？」

「は、はいっ！..」

治療をしている間、先生は俺に聞いてきた。

「別に彼女に世話をしてもらわなくともいいだろ？」「…………」

すべてを知っているといわんばかりに先生は言った。

「あは、知つてました？俺が左利きつてことを…………」

「まあね」

「けど、なんでルムさんを『ここ』呼ばなかつたんですか？」

周囲には誰もおらず、看護士さんをまだ見ていない。

「ま、こっちにも色々と事情があつてね…………それに、ルムが出来ることとこえは絆創膏をへたくそに張る』とぐりこむ」

「…………」

そんなことで看護師をやつていけるのだらうか？

「血を見れば倒れ、注射の先端を見れば倒れ…………まあ、天然が入つてるんだよ」

本当だらうか？それだけではない気がする。

「とりあえず、処置は完了したよ。さ、ルム・ハーベンの『ここ』

戻つて朝食を“あ～ん”してもらつことだね

「…………はあ、わかりました」

「ああ、そういうば、もつ部屋が変わつてると思うから…………」

先生は個室の番号を書いて俺に渡して手を振つた。

「健闘を祈つてるよ」

「…………」

誰と戦えとこつてこいるのだらうか？

「本当に申し訳ありませんでした！」

ルムさんは膝に頭がつぐぐらいまで頭を下げていた。

「そ、そんなに頭を下げなくとも…………ほら、はやく朝食を食べさせてください」

「わ、わかりました！」

ベッドに座り、俺は母親にもされたことがないだらう人生初の“

あ～ん”をしてもらおうとしたのだが……

「うぐつ！？」

「す、すみません……」

レンゲがのどにぶつかり、嗚咽感がしたりもした。そのなれない手つきに心配で呟いて聞いてみると、彼女はこうことをするのは初めてのようだ。

朝食をもじりながらも俺は完食しきった。

「ふう……」

ちよこつとしか実際のところは食べることが出来なかつたのだが、まあ、それはしようがない。

「いががでした？」

「ん？ おいしかつた」

「そうですか、それはよかつた……」

そういうて彼女はおぼんを片付けた。

「あの、ちよつと質問していいですか、ルムさん」

「なんですか？」

近くのパイプ椅子に腰掛け、彼女はどこからかりんじを取り出すとそれをむき出した。

「えつとですね……」

「あいたつ！……」

みるとナイフで指を怪我していた。俺は慌てて近くのティッシュを掴んで血を押さえることにした。

「す、すいません、蒼疾君」

「いえ、困つたときはお互こまつす……」

左手だけで押さえておき、とりあえず絆創膏を取り出して彼女につけてあげた。

「…………」

彼女はそれを何故か大事そつに抱きしめていた。

「？」

俺の不思議そうな視線に気がついたのか、ルムさんは照れたよう

な顔をしていった。

「い、いやあ…………こんな風に絆創膏をされると嬉しいですよね？」

「え？ 何故？」

「自分を支えてくれる人がいるんだなって思えるんです。たかだか絆創膏、一枚ですけどね。でも、それはとても大切なことだって私は思えるんですよ。母がよく怪我していた私に絆創膏をしてくれました。そのとき、嬉しかった…………私、どんなことも苦手ですけど、絆創膏だけはうまくはれるように何日も何日もがんばって練習したんですよ？ 今じゃ一番うまく貼れると思います。蒼疾君はどう思っています？」

「……とにかく子供じみていたそれまでの行動と裏腹に、素直にこの人の心が見えたような気がした。

「そうですね、たまに俺もそう思えます」

俺はそういって頷いた。なるほど、だから先生はあんなことを言っていたのかと思う。この人は努力家という言葉では足りない、一瞬一瞬に命がけで一つのことに集中すると周りが見えなくなってしまう…………そういう性格なのだ。

そんなことを考えていた俺の耳にルムさんの声が聞こえてきた。

「…………だから、だから私はどんなことがあっても蒼疾君を早く退院させて見せますーどんなことでもしますから何でも言つて下さいね」

窓から注ぎ込まれる日光が彼女を照らし、その姿が天使に見えた俺は頷いた。

「わかりましたー些細なことでも相談させてもらいますー」「では…………朝ちょっとやつすざでしまったとこひを見せてもらいますね」

「へ？」

彼女は俺をベッドに倒すとパジャマを再びとるとしていた！？

「へー？ ちょっとすとーつふーー見なくていいですー」

「だから、大丈夫ですって」

「大丈夫なのは俺です！」

これから先、俺はどういった目にあうのだろうか……………そのことだけを考えると俺は不安で不安で仕方がなかつた。しかしま、この看護士さんがいてくれる限り、俺の病院生活に退屈といつて一文字が出ることはないに違ひない！！

（Fin）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7728e/>

---

聖看護天使『患者にエイド』

2010年10月8日15時11分発行